

図1 2001年「無国籍」者の年齢別割合

資料：法務省「在留外国人統計」より作成

表2 「無国籍」15歳未満の外国人登録者数の推移（1990年～2001年）

（各年末現在）

国籍(出身地)/年	1990年	2001年	増加人数	'90年増減倍率(%)
総数人(%)	1,476(100.0%)	1,941(100.0%)	465	1.3 ( 31.5)
15歳以上	1,343(91.0%)	930(47.9%)	-413	0.7 ( -30.8)
15歳未満	133(9.0%)	1,011(52.1%)	878	7.6 ( 660.2)
0～4歳	74(5.0%)	555(28.6%)	481	7.5 ( 650.0)
5～9歳	29(2.0%)	384(19.8%)	355	13.2 ( 1,224.1)
10～14歳	30(2.0%)	72(3.7%)	42	2.4 ( 140.0)

資料：法務省「在留外国人統計」より作成

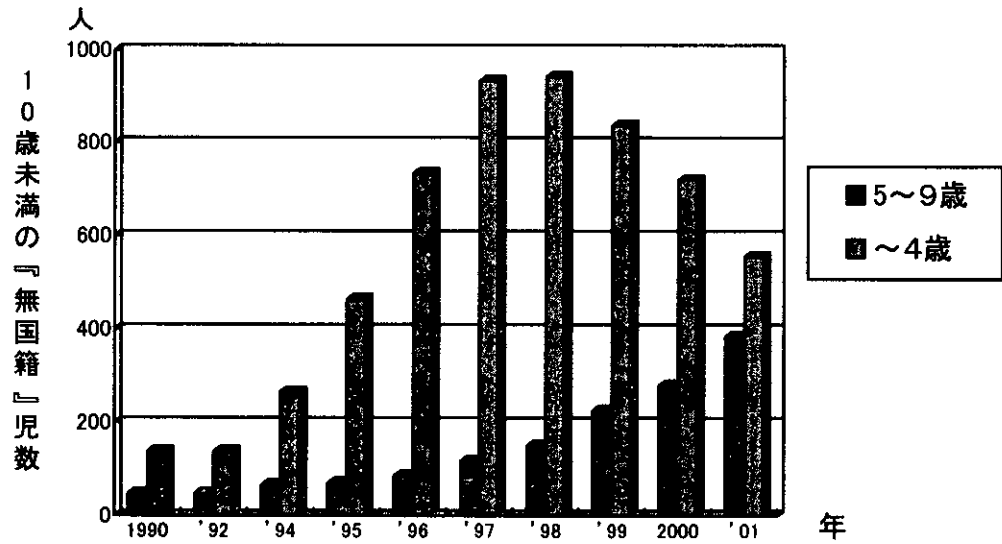


図2 10歳未満の『無国籍』児の推移

資料:法務省「在留外国人統計」より作成('94年までは隔年発、以降毎年)

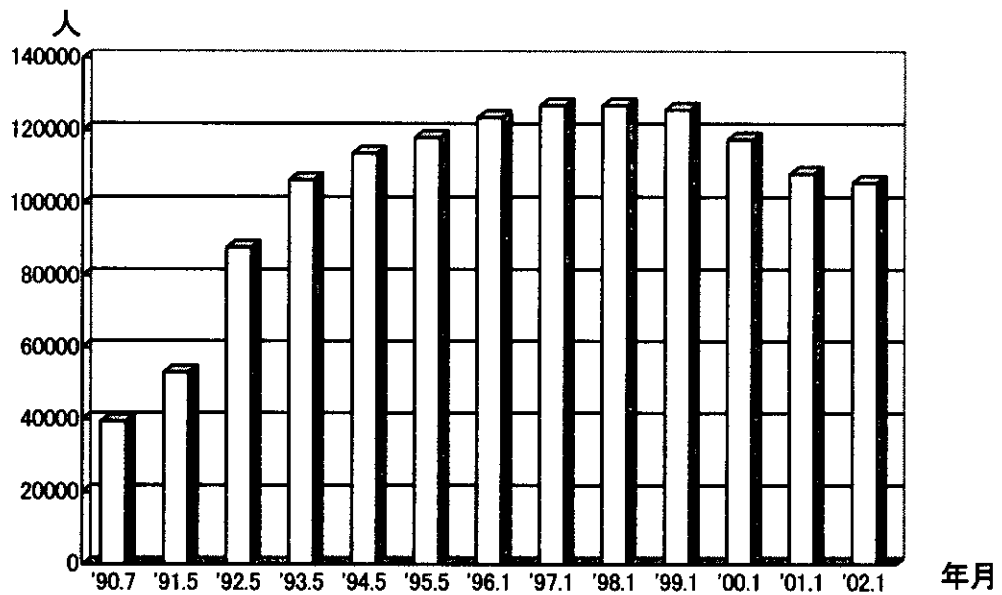


図3 オーバースティ女性数の推移

資料:法務省入国管理統計より作成

平成14年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）  
分担研究報告書

平成14年度厚生科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業  
「多民族文化社会における母子の健康に関する研究」

育児不安に対する多文化保育の影響と効果  
－多文化保育を行っているS保育園での実践から－

李 節子 東京女子医科大学大学院看護学研究科助教授  
井上千尋 東京女子医科大学看護学部  
牛島廣治 東京大学大学院医学系研究科発達医科学教室教授

研究要旨

多文化保育を行っている保育園において母親と保育士を対象に、質問紙による調査と半構造化面接調査を行い、韓国人と日本人の育児不安と影響する要因、その支援について検討した。

韓国人と日本人に共通する育児不安の内容としては、「自分の子育てが正しかったのかわからない」「親として良くないと思う」「仕事との両立の困難さ」が挙げられ、外国人特有の内容は、①言語の問題、②子どものカルチャーショック、③イジメの問題、④子どものアイデンティティに関する不安、⑤日本に慣れなければいけないという不安、⑥就学手続きなどの公的手続きがわからない不安、であった。

育児不安に影響を及ぼす要因は、①人的ネットワーク、②日本語に関する辛い経験、③子どもと母親のアイデンティティの状態、④生活上の不安、であった。子育て観や方法の違い、文化や習慣の違いは育児不安の大きな要因にはなっていなかった。多文化保育の中で自分たちの文化や考え方が尊重されているので、これらの違いが、育児不安に影響するほどの問題にはなっていないと推察された。

母親の育児不安に対する支援として、①多文化保育の実践、②多文化保育以外の通常の保育活動の充実、③保護者同士の交流が挙げられた。多文化保育の実践、すなわち、子どものアイデンティティを形成する本名や母語、文化を尊重し、保育園の中で「当たり前」に名前を名乗り挨拶をすること、「名前が母語で書いてあること」「母親自身の参加を促しながら、母親の文化や習慣を保育園の活動の中に取り入れること」は、母子のアイデンティティの安定につながり、育児不安を軽減させるものであった。本研究により、多民族文化社会における子育て支援として、多文化保育の実践とその普及の必要性が示唆された。

A はじめに

1980年代後半以降、日本で暮らす在日外国人の人口は急増し、現在約200万人の外国人が日本で暮らしている。日本で暮らす子どもや子育てをしている母親も増加し、多民族文化社会における子育ては、母子保健の中でも大きな問題の1つとなっている。

外国人児童の保育の現場においては、言葉、日常生活習慣の相違や子ども達の適応、友だちとの関係作りなど、多くの問題が挙げられている<sup>1)~4)</sup>。一方、マイノリティと言われる在日外国人の母親は、多くの育児不安を抱えていると推察されるが、彼女らが抱える育児不安の実態と、影響を及ぼす要因などに関する検討は未だ不十分である。

このような状況の中、外国籍園児が多く通っている堺市や大阪市の保育園、今回研究対象とした S 保育園など一部の保育園で、多文化保育の先駆的な取り組みがなされている。しかし、そういった保育活動の実際やその影響・効果については評価されていない。

本研究は、多文化保育を行っている保育園において、韓国人と日本人の育児不安の実態と、多文化保育の影響と効果について考察し、多民族文化社会における子育て支援のあり方についての検討を行った。

## B S 保育園の設立経緯と概要

本研究において対象とした S 保育園は、京浜工業地帯 Z 市にある私立認可保育園である。Z 市には主に第 1 次世界大戦以降、相次いで建設された工場や臨海部の埋め立て工事の労働力として、朝鮮人が住み始めるようになった。第 1 次世界大戦前から戦時中は、軍事施設の建設および工業生産の拡大により、朝鮮人人口が急増した。Z 市は歴史的にも在日韓国・朝鮮人の多住地域であるが、近年はニューカマーと呼ばれる人口も急増し、地域社会を形成している<sup>5)</sup>。

S 保育園は、1969 年に無認可保育園として開設された。当時日本の保育園に入園を拒否された在日韓国・朝鮮人の子ども達のために、在日大韓基督教教会が母体となり設立された。その後 1974 年には認可保育園となり、現在に至る。基督教精神に基づき「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」を基本理念として保育を進めている。

近年は日本人、在日韓国・朝鮮人だけでなく、ブラジル、ペルー、フィリピン、中国など、多様なルーツをもった子ども達が増加しており、園児の約 6 割が外国にルーツを持つ子ども達である。

そういった人々が自らの民族を恥じることなく、いきいきと生き、自立できるような「共に生きる」保育を実践している。民族や文化の違い、また、あらゆる障害を認め合い、子ども達や保護者が明日への希望を持ち、他者を思い励まし合い、人として自立できる保育の営みを方針としている。現在、S 保育園では、0 歳から 6 歳まで 60 名の保育を行っている。

S 保育園の活動の特徴と概要を表 1 に示す。

## C 韓国人と日本人の育児不安と要因、支援の検討

### C-1 目的

韓国人と日本人の育児不安と支援について、当事者の立場から検討する。

### C-2 方法

#### 1. 対象

S 保育園に子どもが通園している韓国人一世（以下韓国人と略す）の母親と日本人の母親を対象とした。子どもの年齢は 3 歳から 6 歳とし、1 人の母親が育てている子どもの数、パートナーの国籍は問わないこととした。

研究協力に同意した韓国人の母親 3 名と日本人の母親 3 名を対象とした。

韓国人、日本人ともパートナーは同国出身、全家族が核家族であった。また、子どもに治療を要する疾患や発達の遅れなどがある母親はいなかった。1 人の母親が育てている子どもの数については、韓国人の母親 1 名が子ども 1 人であったが、韓国人の母親 2 名、日本人の母親 3 名は 2 人以上の子どもを育てていた。

韓国人の在日年数は、10 年以上、約 7 年

が各々1名、1年未満が1名（ただし学生として数年間の在日経験あり）であり、全員日本語での会話が可能であった。子どもは、日本生まれが2名、韓国生まれで在日数カ月の子どもが1名であった。

## 2. 調査方法

### 1) 質問紙調査票による調査

「子ども総研式育児支援質問紙」<sup>6)</sup>に改良を加え（以下「総研式質問紙」と記す）、対象者の育児不安の程度と要因について検討した。韓国人にはハングルと日本語の併記版、日本人には日本語版の質問紙を作成した。主な質問項目は以下の通りである。

- (1) 育児困難感Ⅰ（育児への心配・困惑・不適格感）
- (2) 育児困難感Ⅱ（子どもへのネガティブな感情・攻撃衝動性）
- (3) 母親の抑うつ傾向
- (4) 子どもの心身
- (5) 子どもの育て難さ (Difficult Baby)
- (6) 「子育てについて相談できる人」
- (7) 自由記載「現在子育てについて悩んでいることや心配なこと、意見」

- ①「言語の問題」
- ②「習慣や文化」
- ③「子どものアイデンティティ」
- ④「夫やパートナー、ご家族のこと」

### (8) 母親の基本的事項

- ①母親の年齢、在日年数
- ②パートナーの国籍、年齢
- ③子どもの年齢、数、
- ④家庭での会話言語
- ⑤母親の日本語能力        など

以上の質問紙を、副園長を通して手渡しで配布、回収した。

### 2) 半構造化面接調査

質問紙を回収できた対象者に、面接調査を依頼し、同意の得られた韓国人の母親3名、日本人1名に、半構造化インタビュー法による面接調査を実施した。

韓国人にはハングルと日本語の併記、日本人には日本語のインタビューガイドを手渡し、日本語で質問した。

面接調査では、得られた結果について調査者が守秘義務を負っていること、答えたくない内容は答えなくても良いこと、途中で不都合が起きた場合は中断しても構わないことを説明し、信頼関係が十分に得られた時点で調査を開始した。礼節をわきまえ、話しやすい雰囲気で行うよう心がけた。また対象者の同意を得、インタビュー内容はテープに録音した。

韓国人に対しては、母語以外のインタビューであったため、わかりやすい言葉でゆっくり話し、質問内容が伝わっているかどうか、その都度確認するよう心がけた。相手の日本語が分かりにくい場合は、再度質問し確認した。

調査期間は、2002年10月1日から12月10日、1人当たりの面接時間は1時間から1時間20分であった。主な調査項目は以下の通りである。

- (1) 文化や習慣の異なる社会での子育てについて
- (2) 保育園での養育や支援についての意見
- (3) 保育園以外の社会や行政に望むこと

## 3. 分析方法

1) 「総研式質問紙」を用いた調査では、「子ども総研式育児支援質問紙の手引き」に準じて評価した。

2) 自由記載については、ハングルで記載してある場合は、翻訳家（韓国人一世）に日本語訳を依頼した。内容は、各項目毎にすべて書き出した。

3) 面接内容は、事例の背景の多様性と個別性を重視し、事例毎に、内容分析 (Content Analysis) に基づいたフレームワーク法<sup>7)</sup>を用いて分析した。事例毎にすべての面接内容を分析し、質的データを分

析するためのカギとなる問題、概念、話題を拾い出し、分析と索引づけを行った上で、その索引項目毎に内容を要約した。

自由記載および面接内容の検討、索引づけと分析は、共同研究者が相互の合意形成を図りながら行った。

4) 自由記載まで記載のあった事例、あるいは面接調査まで実施できた5事例(韓国人3名、日本人2名)について、事例毎に自由記載と面接内容から、育児不安と要因、支援について考察を加えた。

### C-3 結果 育児不安と要因、支援

「総研式質問紙」による調査では、育児不安の程度は、韓国人日本人とも特徴的な傾向は認められなかった。

自由記載内容は、個人のプライバシーに関わると思われる内容以外はすべて書き出した(表2、3)。また、面接調査内容は分析方法に沿って要約した(資料)。

韓国人では、面接内容に沿う索引項目として A 子育て不安、B 子育て観の違い、C 子育て方法の違い、D 子育ての経験、E 育児情報、F ネットワーク、G 文化や習慣、H 子どものアイデンティティ、I 自分のアイデンティティ、J 保育園の関わり、K 家族の支援、L 日本社会と外国人が挙げられた。

日本人では、1名に面接協力が得られ面接調査を行った。面接内容に沿う索引項目として A 子育て不安、B 子育て観の違い、C 子育て方法の違い、D 子育ての経験、F ネットワーク、G 文化や習慣、H 子どものアイデンティティ、I 自分のアイデンティティ、J 保育園の関わり、K 家族の支援、L 日本社会と行政が挙げられた。育児情報に該当するような意見は聞かれなかった。

### C-4 考察

#### 1. 育児不安と要因、支援の検討

##### 1) 育児不安の内容

#### (1) 韓国人、日本人共通の育児不安

韓国人と日本人に共通する育児不安として「自分の子育てが正しかったのかわからない」あるいは「親として良くないと思う」「仕事が忙しくて子どもに構えない」という内容が挙げられた。「親として良くないと思う」は川井ら<sup>6)</sup>の「母親としての不適格感」に通じるものであり、仕事との両立の困難さは、日本で働くブラジル人を対象とした先行研究でも述べられている<sup>8)</sup>。国籍に関わらず起こりうる不安であると言えた。

#### (2) 韓国人特有の育児不安

外国での子育て特有の内容として、言語の問題、子どものカルチャーショック、イジメの問題、子どものアイデンティティの問題が挙げられた。

言葉の問題では、「ハングルを話さない」「ハングルを忘れてしまう」という不安、自分が日本語の能力が低いので子どもに教えられない不安も挙げられていた。これらは外国人特有の、しかも起こりやすい不安であると思われた。

言葉の問題について、他には「自宅で母語を使うことの妥当性に関する不安」があった。子どもが韓国生まれで、突然日本にやって来て日本語を覚えなくてはならない場合、自宅と保育園の使用言語が違うことは子どもにとっても負担である。そのような中、ハングルを忘れないために自宅でハングルを使うという手段を選ぶのは、親にとっては大きな決断を迫られることである。また、ぜひハングルを覚えて欲しいと思っている母親や、いずれ帰国を考えている母親にとって、子どもがなかなかハングルを話さないと、「もっとよい方法があるのではないか」という不安にも繋がるであろう。

子どものカルチャーショックと、それに対する母親の不安は、共に重大な問題であ

る。母親に在日経験があったり、来日理由が親の仕事の都合である場合は、子どもに対する負い目が加わってくると推察された。

子どもが韓国人ということはいじめられるのではないか、あるいはいじめられているという不安以外に、帰国を考えている母親の場合は、帰国後にいじめられるのではないかという不安があることが明らかとなった。仕事の都合で居住地を移動していく母子の場合は、常にマイノリティであることが多く、子どもが置かれる環境も厳しい可能性がある。このような問題に対しては、マイノリティである韓国人を対象とした支援だけでは不十分で、周囲のマジョリティである日本人に対しても目を向ける必要がある。

子どものアイデンティティに関しては、「自分と同じように韓国人として育てたい」と願う親ばかりではないことが明らかとなった。自分と異なること、つまり「韓国人としてのアイデンティティが形成できないこと」が不安になる場合と、親のアイデンティティと異なっても「日本と韓国、半分半分」と思っていることに満足している場合がある。「韓国人として、日本人としてというより、自分らしく育てたい」が、「将来、親の意見と合わなくなるのではないか」というように、親の思いは複雑であった。子どものアイデンティティについては、「親と異なる」もしくは「親の期待と異なってしまう」不安と言えた。

親は子どもに対して様々な期待をするものであるが、「アイデンティティに関する期待と不安」は、外国人特有のものであると考えられた。韓国人の母親が、子どものアイデンティティに対して柔軟な考えを持てるのは、多文化保育を行っている保育園に通っていて、自文化を尊重されてい

ることや、色々なルーツの子ども達や親たちと接している影響であると思われた。

## 2) 育児不安の要因

(1) 韓国人、日本人共通の育児不安要因  
国籍に関わらず共通する要因として、精神的な拠り所となる人的ネットワークが挙げられた。これは多くの先行研究と一致するものであった。そのネットワークは、情報交換や助け合いのみならず、精神的な安定や自分の子育てに対する承認、アイデンティティの安定にもつながる。それには同じ価値観を持っている人であることが望ましい。特に外国人の場合、日本人の中では「合わせてしまう」意識が働く可能性があることや、文化や習慣の違いで戸惑ったときの意志決定の必要性を考慮すると、やはり同国人であることが条件であると思われた。

日本人の事例では、「生活への不安」が挙げられていた。現在の社会制度や不景気を反映したものだと考えられる。今回は韓国人の母親は挙げていなかったが、外国人は社会的・経済的に不安定な立場であることも多く<sup>9)</sup>、国籍に関わらず要因となりうるものであると推察される。

## (2) 韓国人特有の育児不安

外国人特有の育児不安の要因としては、育児不安の内容に直接結びつくような経験、例えば「日本語が読めなくて辛い思いをした経験」が挙げられる。本研究では、日本語の会話が出来る対象者であったが、日本語のコンプレックスや不安を抱えた母親にとっては、「言葉の違い」より直接「日本語ができないことを子どもに指摘された経験」が、大きな要因として考えられた。

子どものアイデンティティが親の期待通りか、またカルチャーショックがなく安定しているかという「子どものアイデンティティの状態」は、要因としても育児不安

に影響してくると思われた。そして親自身の「子どものアイデンティティに対する考え方、要求の高さや柔軟性」も育児不安に影響を及ぼす。

一方、母親のアイデンティティの状態も大きな要因であった。在日年数が短いほど育児不安が強いという研究<sup>8)</sup>もあるが、本研究では必ずしもそうではなく、たとえ在日年数が長くても、母親のアイデンティティが不安定であれば育児不安が高くなると示唆された。在日年数や日本語の能力は1つの基準にしか過ぎず、母親が安定したアイデンティティを持っているか否かが重要であると思われた。

「子どものアイデンティティに対する親の考え方」には、親自身のアイデンティティや自分のアイデンティティに対する考え方が影響する。母親のアイデンティティが不安定であれば、子どものアイデンティティに対する要求が強く、育児不安も高くなる。母親のアイデンティティが安定し、精神的に安定していれば、子どものアイデンティティに対しても柔軟な考え方で対応でき、育児不安も低いと推察された。母親のアイデンティティが安定するには、子どものアイデンティティ、それが現れる言動や行動が重要な因子であり、これらは複雑に影響しあうと思われた。

### (3) 子育て観や方法の違い、文化や習慣の違いと育児不安の関係

子育て観や方法の違い、文化や習慣の違いは、先行研究で良く取りあげられる。しかし本研究では、韓国人の場合も日本人の場合も、育児不安に直接影響はしていない。違いを認識しないこともあり、また本人に選択できる力や環境が整っており、慣れることができたり、相談できる相手が身近にいれば、大きな要因にはならない。

本調査において、韓国人の母親のS保育園への高い満足感や安心感、信頼感、保育

園の現状から判断すると、多文化保育の中で自分たちの文化や考え方が尊重されているので、これらの違いが、育児不安に影響するほどの問題にはなっていないと推察された。

しかし、本人に「合わせる意識」が強く働いたり、異文化による子どもの教育への影響が強くなり親が許容できない場合には、育児不安に影響する。

### 3) 当事者からみた支援の評価

本研究において多文化保育を行っているS保育園で育児不安に対する支援について考察すると、以下の3点が確認された。

#### ①「多文化保育」の保育活動による効果

「多文化保育」という活動のなかで、韓国人の母親の評価が特に高かったのは、韓国の言葉を大事にして挨拶などをハングルで行っていること、子どもの名前をハングルで記載していること、行事等、ことあるごとに、子どもに韓国の文化を伝えていることである。これらは、子どものアイデンティティ形成だけでなく、母親のアイデンティティも安定させる効果が認められた。先行研究で挙がるような「保育園内の文化の違い」が育児不安の内容として挙がらなかったのは、多文化保育の効果と言える。

日本人の母親は「大人になって、いきなり多文化と言われても無理」であり、挨拶や名前など「公平性が認識できる程度」は良いが、行事に大きく組み込まれると抵抗感が強いようであった。「多文化保育」の困難さを認識させられるものであった。

#### ②多様なルーツを持った子どもが集まることによる効果

多様なルーツを持つ子どもが集まることにより、保育士も子ども達も「異文化」に慣れているので、適切な関わりが期待できること、自分の文化やアイデンティティを自覚できること、「自分と異なる人た



ち」を自然に受け入れられることなど、多くの効果が認められた。この効果により、ますます多様なルーツをもつ子ども達が集まるというサイクルが生まれているのだと思われる。またこのような効果は、日本人も韓国人も認識していた。

### ③多文化保育に関わらず行われている保育活動の効果

多文化保育に関わらず行われている、しつけや生活のけじめ、お帳面による交流、自然と親しむなどの保育活動、忙しい母親への配慮などは、国籍に関わらず重要な関わりだと思われた。自然と親しむことについては、今回このように回答した韓国人の母親が、韓国でも都会に住んでいたためとも考えられる。どこの国籍であろうと「やってはいけないこと」と「やるべきこと」については、毅然とした態度で保育士が関わっており、母親の国籍に関わらず、信頼を得ていた。

子育て観や方法の違い、文化の違いや習慣は、本研究では、韓国人の場合も日本人の場合も育児不安に直接影響はしていない。韓国人の母親のS保育園への高い満足感や安心感、信頼感、保育園の現状から判断すると、多文化保育の中で自分たちの文化や考え方が尊重されているので、育児不安に影響するほどの問題にはなっていないと推察された。多文化保育が外国人の育児不安を軽減させる働きを担っていると考えられる。

## D 保育者からみた韓国人と日本人の育児不安の違いと具体的支援の検討

### D-1 目的

保育者からみた韓国人と日本人の育児不安の違いと具体的支援の検討を行う。

### D-2 方法

### 1. 対象

S保育園で保育活動をしている保育士2名（S保育園での保育歴20年の保育士および3年の保育士、ともに日本人）

### 2. 調査方法

研究1の調査終了後、副園長を通してS保育園の保育士に面接調査を依頼し、同意の得られた保育士2名に、半構造化インタビュー法による面接調査を実施した。面接調査では、あらかじめインタビューガイドを手渡し、得られた結果について調査者が守秘義務を負っていることを説明し、信頼関係が十分に得られた時点で調査を開始した。礼節をわきまえ、話しやすい雰囲気で行うよう心がけた。また対象者の同意を得、インタビュー内容はテープに録音した。調査時期は、2002年12月18日と20日、1人当たりの時間は1～2時間であった。主な調査項目は以下の通りである。

#### 1) 多文化保育について

大事にしていることや配慮していること

どんな子ども達に育てて欲しいと思っているか

2) 社会・文化的背景による育児不安の違いと、母親から喜ばれる支援について

3) 社会や行政に対する意見

### 3. 分析方法

研究1と同様に行った。

## D-3 結果

保育士の面接内容から、目的に沿った内容ではA S保育園の基本理念、B 保育士として大事にしていること、C 子ども達の将来への願い、D 多文化保育の実績、E 具体的支援、F 外国人と日本人の育児不安の違い、G 多文化共生社会と保育、H 行政や社会への要望、が索引項目として抽出された。

#### D-4 考察

##### 1. 保育者が考える外国人と日本人の育児不安の違い

2人の保育士のインタビュー内容から、保育者が考える外国人と日本人の育児不安について考察する。

保育士は基本的に国籍などを意識して対応しているのではないが、親には外国人ということと特有の不安があると述べている。具体的には、①名前や言葉など「日本に慣れなくてはいけない」「日本風に、あるいは日本と同じにしない」というプレッシャーからくる不安、②子どもが日本語しか話さなくなること、またそれにより、母語を話す親に反発してしまう不安、③保育園以外の、例えば就学手続きなど公的機関の手続きがわからないという不安、④子育て以前の生活不安、である。

日本社会は外国人に対して、意識、無意識に関わらず「適応」「同化」を求めることが多い社会だと言われている<sup>10)</sup>。親がかつてその様な経験をしたり聞いたりすると、我が子も、日本人と言葉や名前が違うことでいじめられるのではないかという不安から、「日本風の」通称を名乗ったり、無理に日本語を話そうとする。

言語の問題は、外国人の医療、教育に関わる問題の中で、常に指摘されている。日本語で書かれた書類や専門用語がわからないなどである。また、子どもにとっても母国文化の内面化の途上の場合、日本語の習得は逆に母国語の忘却を促し、親子間でのコミュニケーションの問題を生みだしている<sup>11)</sup>。子どもが日本生まれであれば、両親の文化に触れる機会はほとんど無く、圧倒的に日本の文化や言語に触れる機会が多くなる。前章でも考察したとおり、この問題はますます切実になっていくと思われる。

生活不安については、亀山ら<sup>12)</sup>は、「日米とも、育児不安の高い母親の特徴としては、日常生活の中で身体の疲労感と気力の低下を感じながら、育児に対しても意欲の低下や不安の徴候を顕著に示す」と述べている。外国人の場合、仕事を1日でも休めばそのまま辞職に追い込まれる可能性が高いので、常に生活への不安が存在している場合がある<sup>9, 13)</sup>。本研究でも、育児不安の要因として生活不安が考えられた。

##### 2. 多文化保育における育児不安への具体的支援

保育士が実践している具体的な支援として以下のことが挙げられる。

###### 1) 本名と母語を尊重し、最大限使用する努力

①本名と母語を大事にし挨拶などは母語で行い、家庭でも母語をつかうことを促す、②保護者との連絡帳は多言語のもの（保育園が独自で作成）を使用し、母親も母語で記入できるようにする、③保育園からの連絡は易しい日本語もしくはルビ、一部母語を使用する、④様々な手段を使って保護者とのコンタクトをとる、などである。これらは先行文献でも述べられているものである。これらの支援は育児不安を直接軽減するとともに、子どもと母親のアイデンティティを保障するものである。本研究において、保育士もその効果を実感していることが確認された。

母親への正確な意思伝達のためには、すべて母語が望ましく、S保育園では、行事説明など必要な場合は通訳を依頼して通訳している。

###### 2) 母親の文化を尊重し、保育園にも取り入れる

母親が自分の文化や料理、歌などを保育園でアピールできるような場をもち、保育士も子ども達も、母親から習うようにする。しかし、その際「日本に慣れなくては」と

思っている保護者が本国のことを思い出せなかったり、言い出せない場合もあるので、タイミングに気を付ける。

母語や文化を大切にすることで、その言葉や文化をもっている親が子どもの誇りになり、母親と子どものアイデンティティが安定する。先行研究でも述べられている支援の1つであるが、実際に保育士もその効果を実感している。母親からの評価も高かった支援である。

### 3) 日本人の保護者との交流

日本人の保護者と外国人の保護者の交流は、先行研究ではあまり触れられていない。保護者が集まる習慣のない文化の人や必要性を感じない人に対しては、その意義や利点から説明する。ただ、日本人と外国人の交流は難しいと保育士自身も感じており、母親への調査からも同様のことが言えた。

### 4) 日本人保護者への配慮

「多文化保育」というと外国人を対象にしたものと捉えられがちである。実際の保育現場では、「多文化」に慣れていない日本人が抵抗感を持つこともあり、日本人が肩身の狭い思いをしないように、日本人、外国人両方の保護者への対応も重要である。

### 5) 生活背景に対する配慮

母親に子育ての理想論や保育園の都合を無理強いしない、責めないなど、保育園としてできる範囲内で協力している。先行文献<sup>9, 13)</sup>でも、外国人の生活の苦境と、育児不安への影響が触れている。生活が安定しないと、子育てを一緒に考える状態になれない。

保育士の中に特別なことをしているという意識はなく、保育士の苦勞と努力の賜であり、「子どもと保護者の事情に合わせ、一人一人を大事に対応する」「保護者と一緒に子どもを育てていく」という保育園の

基本的姿勢が伺えた。また「わからないことを保護者が言い出せる信頼関係」の必要性を、保育士自身が実感している。

### 3. 多文化保育普及の課題

面接調査の結果から、保育方針が保育園によって異なり、多くの保育園は「日本になじんで」という方針をとっていることが明らかとなった。S保育園は「特別視」されている現状である。現在、現役保育士を対象とした多文化保育に関する研修はほとんどなく、自治体によって取り組みが全く異なっている。保育士が面接の中で、「S保育園が発信していく役割を感じている」と述べたとおり、多文化保育が「一部の保育園の特別な活動」に留まらない努力をしなければならぬ。

### E まとめ

多文化保育を行っている保育園において、その効果が明らかとなった支援は、①多文化保育の実践、②多文化保育以外の通常の保育活動の充実、③保育者同士の交流、である。

多文化保育を普及していくためには、現役保育士への研修、保育園同士の交流と協力が今後の課題であった。

韓国人と日本人の母親の育児不安には共通する部分と、韓国人の特有の不安や要因があることが明らかとなった。

対象の母親に見られた育児不安要因の関係について、韓国人と日本人に共通する育児不安の内容としては、「自分の子育てが正しかったのかわからない」「親として良くないと思う」「仕事との両立の困難さ」が挙げられた。親としての不適格感や仕事との両立の困難さは、先行研究と一致するものであった。

外国人特有の内容は、①言語の問題、②子どものカルチャーショック、③いじめの

問題、④子どものアイデンティティに関する不安、⑤日本に慣れなければいけないという不安、⑥就学手続きなどの公的手続きがわからない不安、が挙げられる。

言語の問題では、「母語を話さない、忘れてしまう」「日本語を教えてあげられない」という不安、「自宅で母語を使うことの妥当性への不安」が挙げられた。

子どものアイデンティティに関しては、今まで「文化や言葉の違い」と表現されてきたものであるが、それだけでは不十分で、「子どものアイデンティティが自分の期待と異なる不安」と言えた。「子どもが親に反発してしまう」不安も、深刻な子どものアイデンティティの問題である。

日本で子育てをする場合、母国と違う様々な手続きをしなくてはならないので、公的な手続きがわからないなどの保育園以外の問題は、先行研究でもよく述べられている。これを保育士が、日常保育活動の中で認識できているのは、相当な信頼関係があるからと考える。

育児不安の要因としては、以下のことを挙げることができる。

#### 1. 人的ネットワーク

人的ネットワークは、日本人、韓国人共通の要因で、先行研究でよく挙げられている。これは、情報交換や助け合いのみならず、精神的な安定や自分の子育てに対する承認、アイデンティティの安定にもつながる。それには、同じ価値観を持っている人、同国人であることが望ましい。

#### 2. 日本語に関する辛い経験

現在抱えている不安、例えば韓国人の母親の育児不安「子どもに日本語を教えてあげられない」に直結するような、辛い経験「日本語ができないことを子どもに指摘されたこと」は、育児不安に影響する。

#### 3. 子どもと母親のアイデンティティ

子どもと母親のアイデンティティは、今

まで「言語や文化の違い」としか述べられてこなかったが、それだけでは表現できないものである。母子のアイデンティティ、アイデンティティに対する考え方は、複雑に影響しあい、直接、間接的に育児不安に影響を及ぼす。本調査の面接内容などから考察すると、最も重要な要因であった。

#### 4. 生活上の不安

生活上の不安は、日本人や保育士から述べられたものである。今まで外国人を対象とした先行研究では度々触れられた内容であるが、日本人を対象とした先行研究では触れられてこなかった。日本人と外国人では程度の差はあるが、現在の社会情勢を考慮すると、深刻な要因と言える。

#### 謝辞

本研究を進めるにあたり、多大なご配慮をいただいたS保育園の金性済先生、南京成根先生、ご協力いただいたお母様方、保育士の方々に心より御礼申し上げます。

#### 文献

- 1) 新倉涼子(2001)外国人子女の保育—日本人の多文化理解と共存の観点から—, 千葉大学教育実践研究, 8, 225-234.
- 2) 宮川充司、中西由里(1994)日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究(I), 椋山女学園大学研究論集, 25, 47-74.
- 3) 箕浦康子(1994)異文化で育つ子ども達の文化的アイデンティティ, 教育学研究, 61(3), 9-15.
- 4) 甘日出里美(1999)保育所における異文化間の友だち関係の微視的分析, 保育学研究, 37(1), 43-50.
- 5) 在日本大韓民国青年会中央本部 宣伝部(2002)「歴史を伝える運動」中間報告書 2001年度版, 在日本大韓民国青年会中央本部.
- 6) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博

仁・中村敬・恒次欽也（1997）育児不安に関する臨床的研究Ⅲ—育児困難感のアセスメント作成の試み—．日本総合愛育研究所紀要，33，35-56．

7) Pope C, Mays N 編 大滝純司監訳（2001）質的研究実践ガイド 保健・医療サービス向上のために．医学書院，東京．

8) 清水嘉子、増田末雄（2001）在日ブラジル人の母親の育児ストレス．母性衛生，42（2），473-480．

9) 李節子・池住圭・牛島廣治・中村安秀・井上千尋・高橋謙造（2002）無国籍状態にある子どもの出生、成育、教育環境に関する調査研究．平成13年度厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書．

10) 谷口正子（1998）幼児教育における多文化理解．李節子編，在日外国人の母子保健 日本に生きる世界の母と子．医学書院，東京，99-126．

11) ジャンジーラ前山（1998）異文化社会への適応—在日日系ブラジル人子女の聞き取り調査から—．学校教育研究，13，318-324．

12) 亀山美津子・飯長喜一郎（1995）母親の育児不安についての日米比較調査．家庭教育研究所紀要，17，14-21．

13) 李節子（1998）在日外国人の母子母子保健 日本に生きる世界の母と子．医学書院．

14) 多文化子育てネットワーク，多文化子育て調査報告書，105-118．

15) 星野明子・庄司優子・大戸さとみ・川村明美・佐々木明子・桂敏樹（1998）在日外国人の母親の子育て不安に関する研究．北日本看護学会誌，1（1），9-16．

表1 S 保育園の特徴

- ・保育士は11名で、在日韓国人と日本人、アルゼンチン人の保育士が勤務している。
- ・保育士は、必ずしも全員がハングルが話せるわけではなく、ほとんど日本語で園児と会話する。スペイン語・ポルトガル語を話せる保育士が1人いる。
- ・入園や保育の相談をスペイン語、韓国語、英語で行うことができる。必要に応じて北京語、タガログ語、ポルトガル語が準備できる。
- ・子ども達の来園や退園の挨拶は、基本的には「アンニョン（ハングルで安寧の意）」である。
- ・韓国・朝鮮以外のルーツをもつ子どもや保護者には、「アンニョン」と共に、その母子の母語で挨拶をする。
- ・食事やおやつの際はお祈りがあり、「いただきます」などの挨拶はハングルで行われる。
- ・子ども達は、親が拒否しない限り、本名で名乗る。
- ・園内に飾られる園児の氏名（例：絵の名前、誕生日の名前、道具箱の名前など）は、両親の母語で記載される。（国際結婚の場合は、両親の母語両方を併記）
- ・両親と保育園の連絡帳（お帳面）があり、6カ国語に対応する種類がある。母親は母語で記載する。保育士は、母親に合わせて、ローマ字やひらがななどで記載する。
- ・保育園からの手紙や園内のポスターは、易しい日本語で書いてあり、漢字には必ずひらがなでルビがふられる。
- ・園内には、各国の人形や道具が展示され、各国の童謡をその国の母語で書いたポスターが貼られている。
- ・秋に行われる運動会では、園児、保護者の一部、保育士が韓国の民族衣装を着て、韓国のプンムルノリ<sup>注1</sup>を踊ったり、フィリピンやブラジルの歌に乗って、全員でお遊戯をする。
- ・サマーパーティやOB会など、保護者同士の交流会が行われる。
- ・卒園していった子ども達が安心して過ごせるように、小学校と話し合いを行うなど連携している。

※資料「Hello friends No227」（2002年7月発行）ならびに筆者の観察により作成。

※注1 プンムルノリ・・・韓国の代表的な民俗遊びの1つである。プンムルノリはとても多様な性格を持っている。広い所で音楽を鳴らし踊りを踊るときは舞踊音楽になるが、町の祭祀を行うときにするプンムルノリは神に捧げる音楽になる。農村で厳しい労働をするときには、疲れを取り多数の動作を統一させる行進曲の役割を果たし、豊作や豊漁に対する感謝祭を開くときは祝楽になる。S 保育園では、韓国の民族衣装を着て、チャングやチンなどの韓国打楽器を使ったりしながら円になって踊る。

表2 韓国人の母親の「現在子育てについて悩んでいることや心配なこと、意見」

言葉について	<p>子どもにはできるだけ韓国語を教えたいが上手くいかない。                  韓国語で話しかけても日本語で答えるので、合わせてしまう。                  韓国に帰るチャンスを作ろうと思っている。                  いつ韓国に帰るかもしれない。その時、子ども達が韓国語をよく理解できないのではないだろうか、韓国の学校でいじめられるのではあいだろうか、と心配。                  もちろん私達は韓国語を教えて理解させているが、子どもが日本で生まれて日本の生活をしているので、ますます韓国語を話さなくなるのではないかととても心配になる。                  ハングルを忘れてしまうことが一番心配。                  子どもが数カ月の保育園生活で日本語がものすごく上手くなってしまった。今は自宅でも日本語で話そうとするので、親は子どもが日本語で話すときには答えないようにしている。帰宅してからはハングルで話しているが、これで大丈夫かなと気になる。それでも今はこの方法しかないと思って、子どもに話す時だけはハングルを使っている。</p>
文化や習慣について	<p>日本の生活に慣れない。日本人との付き合いが難しい。                  韓国に帰りたいが、帰れない。                  日本の文化についてくわしいことがわからないので、何とも言えない。                  子どもを保育園に行かせたら元気になった。                  保育園で自然と親しむ活動が多いので、本当に元気になった。                  日本は自然との関係を大切にしながら上手く利用しているのを感じた。</p>
子どものアイデンティティ	<p>韓国人として生きて欲しい。                  それが基本になって、多民族・多文化が理解できる人になって欲しい。                  日本にいつまでいられるかわからないが、もう少し大きくなるといろんな事について聞かれたり悩んだりすると思う。それは韓国人として日本で住むことが一番の理由だと思う。それでも子どもが自分自身について堂々と思うように応援します。ママもパパも良いモデルになるよう頑張っています。</p>
夫やパートナー、家族について	<p>共働きで、仕事や育児、家事のことが自分に重くかかっている。よって、疲れと不安に悩んでいる。それが育児にも響いていると思う。                  主人の協力が何よりも望ましい。                  パパは優しい。                  日本に来てからは、子どもの事について話を良く聞いてくれる。それでもいつも忙しいので子ども達と一緒に遊んであげないので、悪いなと思っている。なるべく時間がある限り、子ども達と一緒にいることを作ろうとしている。</p>

※ 対象者全員の意見を抜粋して記載。

表3 日本人の母親の「現在子育てについて悩んでいることや心配なこと、意見」

言葉について	<p>「バカ」「ふざけんなよ」などの悪い言葉をよく使っているので気になる。兄がいるので仕方がないと思っているが、よく注意する。</p>
文化や習慣について	<p>日本で生まれ育つと自分が日本人であることを自覚し考える事がないので、今の環境は恵まれていると思う。                  身近にいるお友達を通して世界に目を向けられれば良いなと思っている。自分と違う習慣や文化をもったお友達を受け入れ、一緒に成長できる子であって欲しい。ただ、残念なのは日本の古き良き習慣や文化が失われつつあるということ。子どもに伝えられる親がどのくらいいるのだろうか？</p>
子どものアイデンティティ	<p>年齢からみて自己表現がストレートである。特に興味を持ったことに対する集中力はすごいと感じる。                  それを時にはめんどくさいと思いつつ受け止めてあげる余裕をもちたい。</p>
夫やパートナー、家族について	<p>夫や近くにいる両親は子育てに積極的に参加してくれるので助かっている。自分の周りで支えてくれている人たちが子育てに関して自分と同じ考え方であることが一番うれしいし、安心して預かってもらっている。</p>
その他	<p>仕事も忙しく、育児との両立は大変だと思っている。                  でもこの時は一度しかないので精一杯やっているつもり。子どもは全員かわいくてしょうがない。いろいろなことがあるが、毎日新たな発見がある。それを見つけるのが楽しい。子どもはやがて自立し親元を巣立っていくので、それまで楽しませてもらうと思っている。</p>

※ 対象者全員の意見を抜粋して記載。

## 事例1の面接内容 韓国人、在日10年以上、子ども1人(3歳)

## 子育て不安

子育ての悩みは沢山あるが、どうしてよいかわからず、自分で最善だと思ってやっていったが、正しかったのかはわからない。子育ての違いがあり、近所に親や親戚がいないので不安に思っている。子どもがハングルを話して欲しいが、聞くことはできても自ら話さないことが不安に思っている。

- ・子育ての悩みって、いっぱいあるんですね。自分で最善だと思ってやっただけで、それが正しかったのかわからないし。
- ・子育ての違いがあると、不安であることは不安であると思うんですね。近所に親とか親戚とかがいなくて、不安であると思うんだけど。
- ・(子どもがハングルを話すように) 気を付けているんだけど、なかなかできなくて。聞くのは聞くんだけど言葉をしゃべらないから、しゃべってって言ったらしゃべれないことはないんだけど、自分からは韓国語をしゃべらない。

## 子育て観の違い

自分が育ったことを思うと、日本とは根本的に違うことがあり、人によっては不安に思ったりするだろうが、事例の場合は戸惑ったりはせず、両方を客観的にみることができるので、親の価値観で判断している。

- ・自分が育ったことを思うと、日本とは根本的に違うことがある。
- ・私の場合は両方客観的に見られるから、良いところを取り入れて、自分が親として判断してやればいいのかと思うんですね。しょうがないと。

## 子育て方法の違い

子育て方法の違いについては、韓国の子育て方法も日本の子育て方法もわからないので、違いは一概には言えないと思っている。

- ・韓国での子育てが何かというのが、まずわからないですね。
- ・日本と韓国の子育てがどう違うのかは一概に言えない。自分がいまだにわかっていない。

## 子育ての経験

日本で上手く言葉が通じなかった当時、辛い経験をしている。自分が行ってきた子育てに対しての「それで良いのだ」という承認を受けていないと感じている。

- ・私お産のときに、母乳飲ませなかったんですね。すごく飲ませたかったんですけど、助産婦さんの指導が足りなくて、私わからなくて、飲めなかったんですね。
- ・自分で最善だと思ってやっただけで、それが正しかったのかわからないし。

## 育児情報

自ら韓国の母親に聞いたり、インターネットなどを利用して育児の情報を得るなどの力はある。しかし、具体的に困ったときの子育ての対処方法については適切な情報を得られず困っている。

- ・子育てを一緒にやっている人から直接聞く機会があんまりなくて・・・何かあったらまず韓国の親に電話して聞いていました。
- ・(第2子を妊娠中に子どもの機嫌が悪くなったとき) 本国のお母さんに相談して多分妊娠したからじゃないかと言われてたりするけど、じゃあどう対応したらよいかは、どこにも教えてもらえない。
- ・それからインターネットとかで情報をもったり仲間になったりすることはある。

## ネットワーク

自らサークルなどにも参加したが、そこでも日本人に合わせる意識が働き、育児不安の解消や友人をつくる役割は果たせていなかった。友だちがいないので、直にであって相談しあうことができなかつたり、韓国と日本の子育ての違いで困るなどの同じ悩みを共有したり、アドバイスをもらえないので不安に思っている。自分が行っている育児に対しての承認を得られる人がいない。保育園でのネットワークの拡がりに期待している。

- ・家で子どもと2人きりだったんですね、彼女も友だちが欲しいし、私も同年代の友だちがほしくて、運良くサークルがあったんです。はるばるバスに乗って毎週行っただけです。サークルにいくと、同年代のお母さんがいっぱいいて、そこへいっても、合わせていたんですね、私たちは。
- ・周りに韓国人がいなかった。いるとは思うんですね、自分が知らないだけでいっぱいいるとは思いますが。
- ・保育園の保護者が近所にいっぱいいるんですね。これから彼女たちと付き合っていこうと思います。韓国人かぎらずに、子どものお母さんたちをつくりたい。
- ・身近に出会って相手がいなくて、誰かと直に出会って相談し合ったりできないのが心配、困る。



- ・韓国と日本の子育ての違いがあると、近所に親とか親戚とかがいなくて、不安であると思うんだけど。

#### 文化や習慣

日本に合わせようとする意識が強い。サークルに行っても日本人ばかりなので、合わせてしまい自分を表現できないでいる。

- ・私は日本にあわせなきゃいけないという思いが多いですね。
- ・韓国ではあくまでこういう風にやるけど、家の中ではそういう風にしますけど、一歩家をでたら日本人に合わせるのがいいなと思う。まず自分から行動しなくて、周りを見るんですよ。
- ・サークルにいくと、同年代のお母さんがいっぱいいて、そこへいっても、合わせていたんですね。

#### 子どものアイデンティティ

娘には、韓国人として日本で生きていって欲しいと思っており、日本社会にもそれを受け入れてくれると期待している。また、韓国のアイデンティティを持てる様に、テープを聴かせたり話しかけたりして努力しており、子どもが自ら韓国語を話さないことに不安に思い焦っている。親に対して「ハングルで話して」と言うことにはうれしく思っている。日本で生活することになるので、日本の童謡もわからなくてはならないと考え、両方の音楽や本を聞かせている。

- ・民謡とか童謡とかは、本当に小さい頃からずーっと聞かないと身に付かないと思うんですね。
- ・子どももこれからずっと日本育ちになると思うんですね。だから小さいときからそういうリズムに触れさせないと子どもの感情に残らないと思う。
- ・だからテープもかけたりするんですよ。もちろん言葉も大事。書くのはもうちょっと大きくなってからでも良いから、聞くのとしゃべるのとそれだけはやりたいと思っています。気を付けているんだけど、なかなかできなくて・・・自分からは韓国語をしゃべらない。
- ・韓国の文化、彼女が本当に自分のアイデンティティを韓国の方にもつようにさせたいんですよ。
- ・両方（韓国と日本の）いつも音楽をかけていました。お話のテープもいっぱい韓国から送ってもらって、していました。
- ・日本の本を買って読ませても、日本語より韓国語で話して欲しいと言いますね。私が韓国のネイティブなので、韓国の方が柔らかく聞こえるみたい。お家ではハングルで話しています。
- ・今の在日みたいに韓国人であることを隠して日本人の様に生活しなくても、今日本は随分成熟していると思うんですね。外国人として生きていってほしい。

#### 自分のアイデンティティ

在日期間や日本語の能力に関わらず、日本にとけ込めない、友人もいない。気持ちは韓国に向いているが、韓国についての情報もなく、日本についてもわからず愛着も感じない。結局自らのアイデンティティが不安定な状態になっている。

- ・どういう気持ちかかっていうと、ただ身体だけが日本にいて、気持ちとかそういうのは全部韓国にいて、ここはただ行ったり来たりするだけ。寂しいというか、気持ちが浮いている。
- ・歌も全然心に響かない。言葉がわからないわけじゃない。言葉はわかるけど、心に来ない。自分が聞きたいのは自分が韓国にいた頃の歌。
- ・私は韓国を離れた間の韓国も知らないし、かといって、日本に来た間、日本のことがわかるかといったら日本のこともわからないですよ。
- ・浮いている状態。どこにも根を下ろさない浮いている状態で今生きていると思います。主人ともそういう話をして、「悲しいね、何やっているんだろう」と思うんですね。
- ・生活の本拠地だから、これからずっと日本にいて予定でいるから、もうちょっと日本にとけ込めばいいなあと思うのですが、なかなかそれができない。機会もあんまりなかったし。

#### 保育園の関わり

保育園には、多文化保育を意識して入園させたわけではない。韓国の文化を取り入れ、特に言葉や行事などで韓国の文化を取り入れることをとてもうれしく感じている。そのことで、子どもが韓国人であるアイデンティティを持てるようになり、自然に国際的になっていくことをうれしく思っている。と同時に面接中の表情から、自分に対しても保育園の活動が韓国人としてのアイデンティティを保障してくれていると感じている様であった。

多文化保育以外のことで、子どものしつけと、保育士の優しい関わりがうれしいと思っており、また、保護者間の交流ができることを期待している。

- ・会社から近いというのが、一番最初のきっかけです。
- ・最初は必ずしもSじゃなきゃだめっていうわけじゃなかった。S保育園で良かったとつくづく思います。
- ・他の国の人も沢山いるけど、基本が韓国じゃないですか、そういう基本がよかった。言葉も韓国の言葉を沢山使う。
- ・先生方もすごく丁寧に優しいし、いろんな面で。
- ・運動会やってプンムルやったとき感動しちゃって、こういう民族の文化がでられるんだと思って。入ってからよかった！
- ・彼女が行儀というか礼儀というか、1つ1つ節目節目区切られるのができるようになったんですね。
- ・いろいろな子どもと育つのが凄く良い。自然に外国の名前に接して、彼女も自分が外国人であること、韓国人ということ

- がわかるのかなと感じる。自然に国際的になる。肌の色が違っても変に思わないし、そういうのが良いと思います。
- ・保育園の保護者が近所にいっぱいいるんですよ。これから彼女たちと付き合いたいと思います。韓国人かぎらずに、子どものお母さんたちをつくりたい。

#### 家族の支援

夫は、子育てについては、自分の意見を尊重してくれると思っている。

- ・うちの主人は、子育てに関しては私に合わせてくれる。

#### 日本社会と外国人

日本社会に合わせる意識が働いているが、外国人として発言していく必要性も感じており、そういう機会を望んでいる。

- ・かかわることがあんまりなかったの、わからない。
- ・とにかく合わせようという気持ちがあるんで、こっちはわからないから「何でこうなの」という前に「こんなもんかな」という気持ちが多いですね。
- ・とにかく外国人は弱者なんです。個人の付き合いではそんなことを感じないけど、区役所とか公の場に出た場合は、そういうことを感じる。
- ・私たちの立場も役目だと思っただけですね。慣れちゃうから我慢すればいいって気持ちになるのが良くないと思うんです。
- ・そうしないと日本は変わらないと思うんです。自分たちはわからないんだから。慣れてるし、相手の気持ちもわからないんだから。外国人じゃないわけだから。
- ・そういううたんびに言える何かがあればいいと思うんです。言えるような雰囲気作りがまず大事じゃないですか。

#### 事例2の面接内容 韓国人、在日約7年、子ども2人（第1子が6歳）

##### 子育て不安

自分が漢字に不自由しているため、子どもに聞かれても応えられないので困っている。

もし韓国に帰国したとしたら、子どもに韓国文化のなかでうまく適応してほしいが、子どもがハンゲルができなくて苦しんだり更にイジメが重なるのではないかと心配している。

- ・私が日本人じゃないから、子どもが成長して学校入って、そこまで日本にいたら、私が日本人じゃないから、子どもに教えてあげられないってそれで結構悩んでいます。
- ・日本でも幼稚園や学校でイジメが結構あるって聞いたんです。
- ・普通に帰ったときに、子どもは日本でしっかり勉強したのに、帰国して韓国の言葉を習ったとき、言葉ができない時に苦しむときに、自分の苦しむ時にイジメが重なったらどんなに苦しいかってそれが心配です。
- ・育てるのは、言葉以外何も難しくはないですけど、韓国に帰った時に、別の生活の中に入ったときにそれができるかが難しいと思います。友だちがなければ何も無い、それがお父さんと一番気にしています。

##### 子育て観の違い

韓国と日本では、子育てもしつけも教育も全然違っていると思っている。自分は韓国と日本を半分ずつ取り入れている。

- ・日本に来た友だちがいて、その人達に聞いたら、結構全然違うんですね。
- ・韓国の子育てを取り入れているのは、半分づつかな。半分づつなんです。
- ・韓国だと暴れん坊達沢山みたので、日本ではそんな子どもまだ見たことがないですね。いると思うんですけど。韓国の子ども、暴れん坊じゃなく、人に迷惑かけないように育ててほしいと思う。

##### 子育て方法の違い

韓国と日本では、教育も子育ても違うと思っている。韓国の情報を友人から聞いて、日本の良い習慣や住み易さを自覚している。

- ・勉強するのも全然違うし、育てるのも全然違うんですよ。
- ・韓国のお母さんは何でも買ってあげるんですけど、日本では必要ないなら買わない。何でも買っちゃいけないって教えるって大事ですね。

##### 子育ての経験

韓国の子育ての経験はない。子育ての経験では、厳しい大変なことはなかった。子どもにやっていけないことを教える際、難しい経験をしたが、それが自分の自信となっている。子どもに感じを読んで欲しいと言われ、読めなかったつらい思いをした。

- ・韓国ではあんまりどうやって育てるか見たことがない。
- ・経験はそんなにはないんですけど、私は、自分でこうやってすればいいって言うのはわかる。
- ・子どもを育てるとき、厳しいものはなかったですね、ちゃんと進んでいったんですね。できないときは本をよく見ました。韓国の本は結構あるので、喧嘩したときとか病気のとときとか、本を見てると当たります。

- ・子どもが前に向いていけないとき、困っちゃいますね。悲しいし。私の子どもは他の子どもより、話を聞きやすいので、いいです。私が怒るからでしょうか（笑いながら）・・・
- ・（やってはいけないことを）子どもに説明して理解してあげるか（理解させるか）が難しかった。
- ・子どもが（漢字を）読んでくれて言ったとき、わからなくて本当に困りました。

#### 育児情報

子育ての情報は、韓国の本やテレビ、日本のテレビなどから得ている。また、韓国の友人同士の情報交換が多い。日本の友人はおらず、保育園の日本人の母親からも情報は少ない。

- ・出来ないときは本をよく見ました。テレビも結構ありますよね。日本のテレビ、韓国のテレビ両方です。
- ・たまたま聞きますが、（日本人の）友だちはいないので、保育園のおかあさんたちから少しずつ「私のところはこうやっている」って聞くけど、そんなには聞かない。
- ・ほとんど韓国の友だち結構遊びにくるので聞く。自分の友だちが韓国の人が多いので、その中で情報交換します。

#### ネットワーク

夫の家族や韓国人の友人同士の助け合いがあり、随分助けられていると思っている。韓国から日本に来た在日外国人にとっては、地域コミュニティの助け合いが必要であり、それは子育てに限らず、コミュニティで集まることで寂しさを軽減する効果もあると思っている。

本人が地域コミュニティのネットワークの中に居て、友人も多く、安定した人間関係がある。

- ・自分の友だちが韓国の人が多いので、その中で情報交換します。子どもも韓国の友だち結構いるんですよ。遊びにきます。
- ・アッパ（子どもの父親、自分の夫）の家族は日本に住んでいます。
- ・日本で子育ての力になっているのはお友達、悩みがあったら先生に話とかします。
- ・子どもを育てるときに、私の子どもがこうなったときにどうすればいいの？っていうとき、私より住んだお姉さん達に聞くんですけど、教えてくれます。育てやすいように教えてくれます。
- ・地域で助け合いはないですけど、子どもがいるお母さん同士では助け合ったり、悩みとか話してくれたりいっぱいありますね。
- ・韓国のお母さん達は日本では頼る人がだれもないじゃないですか、私は親戚がいたので助けてもらうけど、お母さん達は親戚がいないので、子どもがいると何もできない。だから助け合います。
- ・お母さん達やお父さん達も食事しながら話したりすることも結構あります。その中では良いって言うか、大丈夫。
- ・韓国はうわーって集まってうわーってやるのが大好き。でも日本ではあんまり近所迷惑でできないけど、結構いっぱいあるんですよ。美味しいものがあつたり、うれしいことがあつたりすると、すぐ電話して集まるんですよ。そうすることで淋しい気持ちが少なくなっていく。

#### 文化や習慣

韓国を忘れないようにハングルを使ったり、文化を大切にしたいと考え保育園を選択したり祭りに参加している。普段の生活では韓国のことを意識して取り入れることはしないが、生活の悩みや友人で集まって食事をして騒ぐなど、日本と韓国の共通部分もあると感じている。

- ・私は韓国を忘れないように、韓国の言葉でしゃべっているんですよ。
- ・生活のことは、国によって、こういう悩みがあったらこういう悩みがあるってどの国も同じですね。
- ・韓国はうわーって集まってうわーってやるのが大好き。でも日本ではあんまり近所迷惑でできないけど、結構いっぱいあるんですよ。美味しいものがあつたり、うれしいことがあつたりすると、すぐ電話して集まるんですよ。そうすることで淋しい気持ちが少なくなっていく。でも日本のオモ二達も、それは同じだと思います。

#### 子どものアイデンティティ

子どもは、ハングルを全部聞くが、話すのは日本語である。以前「日本にいるのだから日本語で話して」と言われたことがあり、つらい思いをした。現在子どもが自分のことを「韓国と日本半分半分」と思っていることをうれしく思っている。韓国の文化を伝えていきたいと考え、保育園や小学校を選択した。色々な国の人の中で勉強して欲しいと考えている。韓国に帰国後も韓国の文化を習って欲しいと考えているが、上手く子どもが適応できるか心配している。

- ・子どもは韓国の言葉を全部聞くんです。でも口からでるのは全部日本語です。
- ・子どもはその（ブムルの）写真を見て、あと私がやっているのを見て「ママやっぱり自分は韓国人だと思う」って
- ・以前は、子どもは韓国の言葉が全然出来ないから、聞くのもできないから、私が韓国の言葉でしゃべったら「オンマ（お母さん）何で韓国の言葉でしゃべるの？ここは日本でしょ、日本の言葉でしゃべって」って言ってました。本当に悲しかった。今は自分も半分づつってわかるみたい。
- ・ここは韓国の文化を結構教えてくれるじゃないですか、そのせいかもしれないですね。
- ・自分も半分づつじゃないかって思っているみたい、話しているとわかるみたい。
- ・小学校入ったら完全に日本になってしまう心配です。

- ・完全に日本の人だけじゃなく、いろんな人のいる中に入って勉強したら良いとおもう。
- ・やっぱり自分が入って勉強して（韓国と日本両方半分半分）心からついてくることができるんじゃないかと思うんです。
- ・韓国に行っても、韓国の文化を習いながらやってほしいと思いますが、上手くできるか心配です。

#### 自分のアイデンティティ

自分は韓国人という強く意識した言葉はないが、明らかに韓国人だというアイデンティティをもっていることが言葉の端々や内容から伝わってくる。

- ・（子どもがハングルで）突然全部書いた紙をもってきて、それはとてもうれしかった。
- ・やっぱり保育園の中で先生達が、自分の物に名前を書いてあげたりするじゃないですか、お母さんも書くんです。ハングルで書くんです。
- ・（保育園は）韓国の文化を大事にしてくれるから。

#### 保育園の関わり

文化を大切にしてくれることを考え、S保育園に入園させた。実際入園して、文化を大切にしてくれることや自然を取り入れること、保育士が優しいことにとっても満足している。

食事や昼寝、挨拶などをハングルで行い、保育園で使用している道具などにも子どもの名前をハングルで書いてある。そのことで、子どもが「これが自分の言葉」と認識することをとてもうれしく思っている。最近では子どもが自分のハングルの名前を練習し、書けるようになったと非常にうれしそうに話していた。

保育園でいろいろな国の言葉を使うことで、その言葉をならうだけでなく、大事にされている感じがすると思っている。色々な国の子どもと育ち、お互い話しあうのは、色々良いところがあると思っている。

- ・韓国の文化を大事にしてくれるから。
- ・Sに入ってよかったことやうれしかったことは、自然を取り入れるのもそうだし、文化のこと教えてくれるし、先生も優しい。
- ・ひらがなは書けるかなって思ったら、ひらがなは「〇〇（名字）」だけ書くんです。でもハングルで全部名前は書けないと思ったんです。教えてくれていなかったから。でも突然全部書いた紙をもってきて、それはとてもうれしかった。
- ・やっぱり保育園の中で先生達が、自分の物に名前を書いてあげたりするじゃないですか、お母さんも書くんです。ハングルで書くんです。これを子どもが自分で見て、これは韓国の言葉、私の言葉って言って、子どもが練習して書いたことがうれしかったです。それで自分の名前を書けるようになりました。うれしかったです。
- ・ご飯食べるとき、食べた後、寝るとき、全部ハングルでやるでしょ。それがすごい役目が大きいですね。
- ・挨拶もハングルだけじゃなく、フィリピンの言葉もあっていろんな言葉があるじゃないですか全部習ってくれるので、感謝しています。大事にされている感じがします。
- ・いろんな国の人と遊ぶことについては、良いと思います。色々な国の人と育つのは、色々良いところがあると思います。

#### 家族の支援

父親は仕事のため子どもと過ごす時間が少ない。

- ・時間がないので子どもと会う機会がないです。

#### 日本社会と外国人

日本では、自分の周囲には韓国人も多く、近所に迷惑をかけない程度なら住み易いと思っている。行政に対する望みは特にない。

- ・ないですねえ。望みって言うのは別で、日本は暮らしやすいです。
- ・日本では他の人の目をみなくていいし、近所に迷惑をかけない程度なら住み易い。
- ・私の住んでいる街は、韓国人の人が多いいので住み易いですけど、噂がよくあるので、良いか悪いかかわからないですけどね。

#### 事例3の面接内容 韓国人、在日1年未満（学生として数年の在日経験あり）、子ども2人（第1子が4歳）

##### 子育て不安

仕事のため子どもを気遣うことができず、残念に思っている。

自分たちの仕事の都合で来日し、子どもが日本に来たばかりで韓国と日本の文化や習慣、言語の違いに戸惑いカルチャーショックを受けているとき、その違いについて上手く説明できなかったことが辛かった。とても心配していた。今は子どもが保育園の生活を楽しくしているので、安心している。親子の文化の違いが一番の問題であり、将来のことを心配している。また、韓国人ということで差別やいじめがあるのではないかと心配している。

- ・今は申し訳ないんですけど、仕事が忙しくて子どもたちにそんなに気を遣うことができないんですね。それが残念です。
- ・（子どもから、韓国と日本の違いを）聞いてそれが説明できなかったんですよ。日本ではそうなんだよって言えなかったんですね。
- ・（子どもがカルチャーショックを受けていたとき）その時にはお父さんの方がもっと心配していました。